

国立会中の会 50周年記念誌

私とくにたち 会報連載全5回 第1回 2026年1月発行

(記念誌は今号が第1回目となりますがこれから会報に毎回、全5回として挟み込まれます。)

中地区の特徴と町名番地の経緯 (中1丁目 大井利雄)

国立会中の会(1976年国立会より独立)は、中1丁目から3丁目と国立市唯一の町内全域を包含する自治会である。中地区は一橋大学(1927年移校)、桐朋学園(1940年入学式)、都立第五商業高校(1944年授業開始)、国立学園(1926年開校)、国立第八小学校(1978年開校)、公民館(1955年旧自治体警察庁を改装)など教育施設が多数あり、文教都市国立市の中核をなしている。

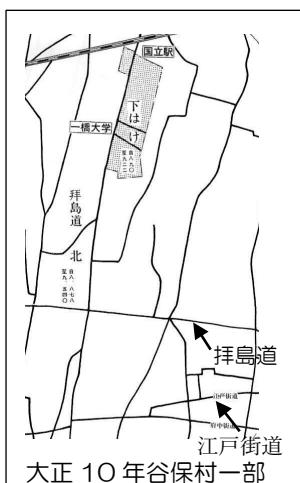
ヤマ

国立大学町と命名された中心地で、拝島道北と呼ばれた谷保村北部の地域。クヌギやクリなど雜木に赤松が混じり、人家は一軒もなく「ヤマ」と呼ばれていた。次頁に示した昭和15年の地図にも雜木林として針葉樹、広葉樹の記号がみられ、国立駅前以外人家は少なかった。



国立開発時の立木の計測

大字国立字中区の誕生



昭和18年東京都制がしかれ、それを機に耕地整理が行われ、下記の通り呼称の一部が変更されることになった。国立地域は昭和17年までは通称「北多摩郡谷保村国立大学町中区・東区・西区」(正式には「北多摩郡谷保村大字谷保字拝島道北・同大字青柳字下はけ・同大字青柳字武蔵野など」と呼ばれていたが、都政移行の昭和18年に「谷保村大字国立」とすることが決まり、昭和19年大字国立が誕生した。中地域は耕地整理の施行に伴って、大字谷保字仮屋上・峯上・拝島道北(8879~9540番地)の各部と大字青柳下はけ(890~922番地)を含め、大字谷保と大字青柳の一部を大字国立の中区とすることに決めて19年から実行された(北多摩郡谷保村大字国立字中区)。大字石田を含めて4番目の大字、「大字国立」が誕生した。境は江戸街道などとし谷保村の北部地域に相当する。番地は次の通り新しく付与された(一部は、旧地番から小字をとって継承)。

東区 大字国立字東区 1~151

中区 大字国立字中区 152~237

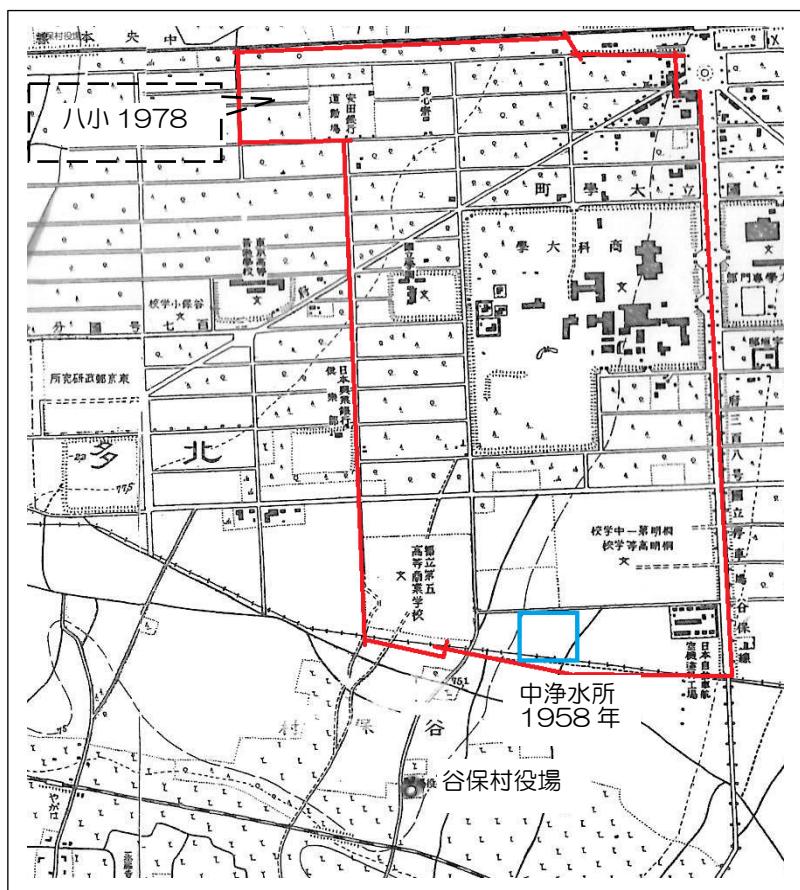
西区 大字国立字西区 238~337

現在の番地

1967年市制施行で、中区から中の新名称となり、昭和44(1969)年10月1日より中地域の字名が全部廃止され現在の新しい町名番地になった。

昭和15年の地図

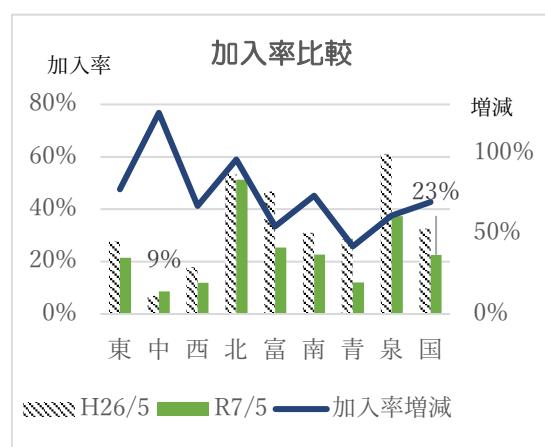
国立大學町の名前が見える。安田銀行運動場は、富士銀行の社宅が立てられ、現在は売却、住宅と中ふれあい公園。第八小学校が1978年に開校。現在の第二小学校は谷保小学校分校。現在のクリオレミントンビレッジマンションのある場所は戦前、日本自動車航空機塗装工場で、後に東京音楽大学付属高等学校があった。大学通りは府三百八号国立停車場谷保線と記され鉄道建設の予定があったことを示している。



昭和 15(1940)年陸軍参謀課作成地図に加筆 (赤枠内が中地域)

世帯数と自治会員の加入率比較

他地区は、減少しているが、中地区は加入率は10年間で25%増えている。しかし令和7年5月現在加入率9%と国立平均の23%の中で最も低い。広い地域で、世帯数の多さに起因しているのだろう。中の会通信は、カラーで内容も豊富である、市のHPにも都度載せており、関心をもっていただき、さらに会員が増えることを願っている。



参考文献:

- 1.『くにたちの歴史』国立市発行、2.『国立市史』国立市発行、3.『日本地名事典 13 東京都』角川書店発行

わが街「国立」（中2丁目 酒向早苗）

小学生の頃、国立の叔母の家に遊びに行くと縁側の前に広い畠と深い森があった。「田舎だ」と記憶に残っていた。その広い畠が我が家家の建つ中2丁目5番地。深い森は国立学園小学校と一橋大学であった。

♪国立の我が学園は 松林 くぬぎの林♪ と学園の校歌が流れてくる。開発される前の国立は谷保の人達の薪を拾う林だったという。

昭和32年、中学1年の2学期に国立一中に転校してきた。音楽の時間に「くにたちの歌」を教えてもらう。国立町教育委員会が公募し選ばれ、出来上がったばかりの頃だった。作詞は中2丁目の長友貞雄様、作曲は当時の国立音大の学生、水野隆司様。♪武蔵野の～♪ に始まり明るく自由と平和と理想を歌うこの歌が大好きになり、国立を誇りに思った。

長友貞雄様の奥様、香子様は当時の町会議員で東の松岡キク様共々、国立の町を文教地区として気品ある町にと奔走し貢献してくださったという。



雨の大学通り

（現在の多摩障害者スポーツセンター前）

昭和35年、高校入学の時「国立は雨が降るとすぐ水が溢れるから、長い長靴を用意するように！」と注意があった。その後随分経つから、大学通りの地下に巨大な排水管が埋められ雨でも皮靴のまま歩けるようになった。

昭和3年、一橋大学が移転して来た頃、矢川の滝乃川学園も又都内から移転して来た。「筆子を読む会」というポスターが目に留まり、月一回、2～3年通った。子育ての終わった頃だったが生涯学習の機会が多いのも国立の特色かと思う。

古い滝乃川の木造校舎で河尾豊司先生の講義は毎回感動した。ある時、障がいのある青年が立ち上がり、「△〇×……」と何やら言った。先生は即、「〇〇君、ありがとう。皆さんに来てくれてうれしいね～」と。そして聴講生には「今のは〇〇君の精一杯の歓迎の挨拶でした」とニコニコおっしゃり、皆の座が和んだと同時に、その青年も静かに最後迄先生の話を聴いていた。講座の内容も素晴らしかったが、この時のふれ合いの素晴らしさは何年経っても忘れられない。

石井筆子の生涯は沢山の本も出ていますし、「天使のピアノ」という常盤貴子が演じた映画にもなりましたので、筆子の残した短歌を一つ記します。

いばら路を知りてささげし身にしあればいかで撓まん撓むべきかは

子供の頃、夕方の買い物を頼まれ富士見通りに出ると、魚屋、八百屋、肉屋、豆腐屋と並び新鮮な食材が籠一杯になった。

又、国立音大の学生が美しい服で行き来し富士見通りは華やかだった。婦人服の仕立てをする店が四軒もあり、発表会のドレスかしら～？とウインドーを羨ましく覗いていた。



令和7年 おとこの台所風景

音大が移転してしまい、既製服が出回り、大型スーパーが建ち富士見通りが寂しくなってしまった様に感ずるのは私だけではないはず。

そんな中で「国立会中の会」の活動は近年とても活発になってきて毎月の「おとこの台所」を楽しみにしている女性ファンも多い。

新年会、旅行、盆踊り、餅つきと企画実行してくださっている方々に深く感謝し、できるだけ参加・協力して参りたいと思います。

国立の自然と文化を守る会について

(中2丁目 佐藤収一)

国立には、中の会のような、街の中でいろいろなボランティア活動をしている会が沢山ありますが、その一つである、私の所属する会の紹介をさせていただきます。

国立の歴史

その昔、南部に位置する谷保地区は、農業が盛んで、甲州街道を中心に民家が立ち並んでおり、明治22年、3村が合併し、国立市の前身の谷保村となりました。

大正時代末期、谷保村は数百戸の農家が点在するだけでした。大正11年10月から箱根土地(株)によって山林であった北部の開発が進み、「理想の住宅地」を目指し、様々な変遷を辿ってきました。その後、人口が増え、昭和26年に谷保村から国立町となり、昭和27年、文教地区の指定を受けました。そして昭和40年、富士見台団地の完成に伴い、人口が5万人を超える、昭和42年に国立市が誕生しました。このように国立市は南部と北部の地域の調和により、今日のような魅力あるまちとなっています。



町役場の火の見やぐらから単線南武線と城山を臨む(昭和39年頃)

誕生の経緯



昭和39年ごろ谷保天満宮前交差点

昭和39年の東京オリンピック開催の影響で景気も良くなり、急速に都市化が進んだことで多摩地区の自然や文化の破壊が進んでいきました。当時の読売新聞社がこのままでは多摩の自然や文化が消滅する恐れがあるとの懸念から多摩地区の各市町村に10万円を寄付し、昭和42年、「自然と文化を守る会」が発足されたと聞いています。

現在、残っているのは多分「国立の自然と文化を守る会」だけだと思います。

活動

活動は非常に広範囲に亘って行ってきました。板碑や仏像の調査、遺跡の案内用立札の設置をはじめ、谷保天満宮の土壠改修工事に当たってはその費用捻出のために市内の文人墨客による作品展を2回開催し

ました。また、郷土館建設に際しては、下地づくりとして当時行われなくなっていた伝統行事の「塞の神どんど焼き」「大瀬干し」の復活や谷保天満宮での「にいだんご」行事等も再開し、その建設資金調達を目的に木版画集（多摩昔風俗2部）を発刊致しました。更に市内の各団体との連携により、国立に住む子供たちにも「ふるさと意識と郷土愛をもってもらう」という想いから、地域の自然と文化の大切さを市民に伝える活動を続けています。また、広報活動として平成3年7月より会報や会の記念誌「あおぞら」を発行しています。



「にいだんご」の風景

課題

当会は発足から57年もの歴史があり、会員は今でも100名を超えていましたが、伝統文化というものは意識して守っていかなければ存続が難しいので活動を絶やさないために定期的に集まり、皆が学び、伝統文化を継承していくことが大切です。一方で、会員の高齢化や若い会員の減少、国立の歴史を理解している会員の減少等により、例えば伝統行事である「塞の神どんど焼き」など、事業として毎年開催は出来ていますが、その活動の原点（意味）を知る人が減って、伝統を維持できなくなる可能性があります。新たな会員を募って継続していきたいと考えています。

これから

国立市は歴史ある地域（谷保村）と北部の開発で生まれた地域の融合であり、100年間あまり変わることなく開発当時のまちの自然や環境が保護されている点は魅力の一つです。また、谷保天満宮祭りなどで、町全体に住民の方々の一体感が生まれてきました。地元の元気なご高齢の方、若い方に参加していただくことで、健康づくりや生きがいづくりに貢献出来たらと考えています。一方で開発が進むと農家が減り、自然や文化の維持や当会の活動も難しくなってしまうので、今後も自然や文化を継承していくことの大切さを伝えています。



今年で国立会中の会が50周年を迎えるにあたり、記念事業として会員から文章を寄稿していただき文集としてまとめることになりました。

今回を第1回として全5回で連載いたします。全号集めていただきファイルなどにぜひまとめてみてください。素敵な文集が完成いたします。

国立会中の会 50周年 PJ係より



わたしにとての50年

(中1丁目 中川 紀美子)

縁あって国立に薬局を開いたのが、丁度五十年前のことです。

当初は医薬品、化粧品、雑貨といった品目が混在し、扱う商品の種類も多く、日々勉強の連続でした。それでもバブル景気が後ろ盾となって新商品ができると即完売、数多くの商品が「売れる時代」にお客様が商品やお店を育てくれた良き時世に商売のスタートを切りました。その頃は薬事法による薬局間の距離制限（店舗同士が100m以上離れてはいけなければならない）があり、競合店が少ないという守られた法律の中にもおりました。2店舗目を大学通りに出店することになり、まだ世間では薬局が夜間営業をしていない時代に店主である主人は頑張って23時まで営業を続けていました。

その後、距離制限の法律がなくなり、富士見通りには「くすりのヒグチ」「セイジヨー薬局」といった大手チェーンが次々に出店しました。大手に負けるわけにはいかない——そう思い、私たちは地域に根ざした薬局を目指しました。時代の流れと共に、大手チェーンは撤退、医薬分業の仕組みも進み、私たちは調剤業に力を入れるようになりました。



ちびっこ天国～車を道路から締め出した

その時の子育てはというと、毎日「おかえりなさい」と言ってくれる人のいない家へ帰る“かぎっ子”にしてしまい、どんなにさみしい思いをさせたか。。。それでも子どもたちが強くてたくましく育ったのは私の母親や妹、姑や地域のみなさんが安全と成長を見守ってくれたおかげだと思っています。

やがて、富士見通りの店がビル建設の都合で建て替えとなり、一時休業。

その矢先、主人が病に倒れ、突然この世を去りました。——まさに青天の霹靂でした。

新しい店を見ることもなく逝ってしまった主人。

「これから、どうしよう……」と途方に暮れていた私を支えてくれたのは、次女とその良きパートナーでした。

「お母さん、一緒にお店を続けよう」——その言葉に、涙があふれました。

時代はアナログからデジタルへ。私は慣れないパソコンに向かい、何度も四苦八苦しましたが、若い二人はスイスイと作業をこなし、頼もしい助っ人ってくれました。

国立の街もどんどん進化し、便利なコンビニや大型チェーンが並ぶ中、「昔ながらの薬局があるのは安心するね」と声をかけてくださるお客様が多く、この地で商いを続けてきて本当によかったと心から思いました。今では、あの時助けてくれた娘婿が山形育ちなのに私たち以上に国立市を愛し、地域に溶け込んだ活動をしていることが、私にとってこの上ない喜びです。

そして、もっと嬉しいことに孫が薬科大学に進学し、私たちの志を継いでくれています。長い年月、いくつもの試練を乗り越えてきましたが、いつも支えてくれる家族・仲間・そしてお客様がいました。

これからも、次の世代へとその思いをつなぎながら、国立の地で生きたこの五十年を、胸を張って語り継いでいきたいと思います。



昭和43年 富士見通りに信号機を設置

写真出典：郷土文化館所蔵他